

夏休み序盤のなかなか寝付けない暑苦しい夜、ぼんやりとテレビの深夜放送を流している、「ヘルズ・ガール」というアニメが始まった。乱れた現世をリセットしようと神が送り込んだエンジェル・ナイトたちを、地獄からやってきたヘルズ・ガールがばったばったと成敗する、勸善懲惡(?) ものの活劇アニメだ。

ヘルズ・ガールの正体は都会に住む一人の女子高生で、運動神経ゼロ、成績はいつも赤点ギリギリ、クラスになじめず友達は一人もいない、唯一の趣味が写経という、とても特徴的、な女の子なのだが、ある日いつものように家で黙々と法華経を写していると、墮天使ルシファアの天啓を受け、闇の処刑人ヘルズ・ガールに変身する能力を授かるのだ。

ヘルズ・ガールに変身した少女は髪がブロンドに輝き、美しい碧眼が冷たく光る。普段のじめじめした性格はどこへやら、処刑人の名にふさわしい嗜虐性と残酷性を、宿敵である天使たちを相手に思うままに発散させる。そして、その変身したヘルズ・ガールのルックス、言動、立ち振る舞い、態度の全てが……僕の良く知る、最後のIDEA以来一度も会っていない、そしてもう会うことも無いであろう少女、比良坂ヨミに生き写しなのだ。もちろん、僕は驚いた。心臓が高鳴り、その日は一日寝付けなかったぐらいだった。

翌日、僕は石神先輩の家にお邪魔した。――先輩は夏休みを利用して、二週間だけ帰国しているのだ。

「ヘルズ・ガールは」

と、石神先輩が切り出す。僕はうなずき、じっと耳を傾けた。

「日本での程度の人気があるのかは知らないが、少なくともヨーロッパでは一部の若者にカルトな人気があるだけでブレイクまではしていない。アンチ・キリストものだから、彼らの本質的な部分で拒否反応を起こすのだろう。アニメ作品としてのクオリティや技術も決して低くは無いが、さすがに同期の『不死機甲師団』や『ももぱん』には劣るし、『絵理奈のカンツォーネ』なんかは一般層にまで人気があるからな。ヘルズ・ガールはどちらかと言えば、バカバカしさを一周して楽しむ通向けのアニメだと私は思うが、どうだろう?」

石神先輩は自宅のOAチェアに深々と座り、身振り手振りを交えながら僕に語ってくれた。

「先輩、せっかくですけど、ヘルズ・ガールの評判はどうでもいいんです」

僕は言った。

「むしろ、作品のヒロインについてなんですけど……」

「山本真古子の演技が素晴らしい」

「いや、声優もどうでもいいんです。あのヘルズ・ガールのルックス……誰かに見覚えありませんか？」

石神先輩は腕を組み、眉をしかめて考え始めた。

「……さあ、少し思いつかないな。私の知っている人間か？」

「何を言ってるんですか。彼女です、比良坂ヨミですよ！似てませんか？風貌とか、言動とか……」

石神先輩は首を捻った。

「……似てないことも無いが……あえて似てると言う程でもないだろう？そもそも、アニメと三次元じゃ、似ても似つかん」

予想外の食いつきの悪さに、僕はびっくりしてしまった。

「君は比良坂の事が気に入っていたみたいだからな。キャラクターのちよつとした特徴や相似に比良坂を投影し、無意識にそう思いこんでいるだけじゃないのか？」

「別にそんな……」

石神先輩は僕の肩を、ぽん、と叩いて笑った。

「いかにぞ、春日。キャラクターなんて人の特徴を持ったただの記号だ。現実世界の人間とはきちんと区別をつけなければな。区別がなくなったらいつか酷い目に遭う。逆のパターンだが、かく言う私も中学時代に、はながらプリンセス、の桜子さんをクラスメイトの女の子にダブらせて……」

石神先輩の奇妙なカミングアウトも上の空に、僕は一人でショックを受けた。

先輩にはヘルズ・ガールが比良坂ヨミに見えない？……何もかもがそっくりなのに？

「そんなに似ているのか」

と、啓一くんはランニングしながら、そう言った。僕たちは夏休みに入って、毎日夕方頃になると山田さんのダイエットにつきあってランニングをしているのだった。——山田さんは僕たちのペースの遅さに苛立ちながら、少し前を走っていた。

「そっくりだよ。一度見てみるといいよ」

僕は言った。

「……比良坂は元気でやっているかな」

啓一くんが遠い目でそう呟くと、少し前を走っていた山田さんがペースを落として会話に参加してきた。

「もう、二人とも、真面目に走りなさいよ！……で、何の話？」

「春日は比良坂の事が忘れられないらしい」

啓一くんが言うと、山田さんは好奇心に目を光らせて僕と啓一くんの顔を交互に見る。啓一くんはもう少し相手を見て話題を選ぶべきだと、僕は思った。

「ちよっと、ちなみさんに詳しく聞かせなさいよ！」

「詳しくなんて別に……」

「アニメのキャラクターとダブらせるぐらい、比良坂の事が頭から離れないらしいぞ」僕の言葉を遮って啓一くんがそう言う。

山田さんは一瞬変な間を作ってから、小さく吹き出したかと思うと、次の瞬間、火がついたみたいに大笑いした。走っている足を止めて、笑って、笑って、笑い倒して、目に涙まで浮かべて、笑いすぎたために横腹がおかしな事になったのか、お腹を押さえて苦しそうにうづくまった。しかし、それでも彼女は笑い続けた。

「ぎやはははは……いい、痛たた……ちよ、変な事言わないでよ！お腹が……痛たたたた……」

「何がおかしいんだよ」

頭に来てそう言っていると、山田さんはこみ上げる笑いと痛みを堪えながら、何度も首を横に振った。

「悪かない、悪かないよ、春日くん。私はそういうのもアリだと思う。うん。笑っちゃってごめんね。反省しまーす」

と、山田さんはそう言うが、半笑いで言われても全く説得力が無い。

「別に僕は比良坂が好きだなんて一言も言ってないだろ！ヘルズ・ガールとの関連性に興味を持っただけさ！」

相変わらずにやにやと嫌らしい笑みを浮かべる山田さん。僕は無視を決め込むことにして、気を取り直し、啓一くんの方を振り向いた。

「……ところで啓一くん、明日は暇？」

暇だ、と彼は言った。

「実は近くの本屋で、ヘルズ・ガールの原作者のサイン会が開かれるんだけど……」

山田さんが悲鳴のような奇声をあげて大爆笑した。

何がおかしくてそんなに笑うのか、僕には全く理解できない。

「いや、僕はそのヘルズ・ガールのヒロインが比良坂に似てると思うからさ……そのヘルズ・ガールの作者と会って話を聞く事は……何かこう、IDEA的な探求に繋がると思……って……笑うな！笑っていると、今に恥をかくぞ！僕の推理はいつだって間違っていないだからな！ヘルズ・ガールのモデルは……絶対に比良坂ヨミなんだ！」

「ヘルズ・ガールにモデル？」

僕の質問に、原作者の天津波嘉男先生がきよんとした顔で、サインをしていた腕を止めて聞き返してきた。

「はい。モデルっているのかなあ、って」

「モデル……モデルかあ……そうだなあ……夢の中で一度出会った少女が、そうかな」  
「夢!？」

僕はぎくりとした。

「うん。僕は夢の中では怪物で、その少女に殺されてしまっただ。たぶん、僕の無意識下のマゾヒズムが投影された夢なんだろうけど……ま、男は概してみんなそういうものだからね。母親にいつまでも叱られていたものさ。で、それが永遠の女性像でもある」

大津波先生の言葉に、啓一くんは難しい顔をして俯いた。

「本当に、それは夢ですか？」

「夢じゃなきゃ何だって言うんだい？」

「……、IDEA、じゃないですか？」

僕が疑いの目を向けてそう言うと、大津波先生は一瞬呆気にとられたが、見る見るうちに表情が強ばっていった。胸の奥に怒りが沸き上がって来ているのが、傍目からでも分かりすぎるほど分かる。僕は思わずぎよっとした。

「……知らないな、そんな作品。また人の作品をパクリ呼ばわりか」

大津波先生は憤慨しつつ、落ち着き払ってそう言った。

「違います、違いますよ。作品とかじゃなくて……」

僕は必死に否定したが、大津波先生は既に聞いちゃいない。

「もういい。こんな宣伝にも何にもならない地方の片田舎で、こっちは善意でサイン会を開いているっていうのに……どうしてこう、無神経なファンっていうのはどこにでもいるのだろうね？君は僕の作品が好きなんじゃないのかね？作品が嫌いなら、読まないでくれ！」

「すみません、別にそういう積もりじゃなくて……」

「まったく、今日は最初からサインなんてする気分じゃなかったんだ。もう帰ろう、馬鹿馬鹿しい。撤回撤回。お疲れ様！」

と、大津波先生は言うが早いか、さっさと荷物をまとめて本屋のスタッフルームに引っ込んでいった。僕の後ろに続いている行列からナイフのような視線が刺さる。僕と啓一くんは逃げるように本屋を後にし、文句の一つでも言わなければ気が済まないと思いついてきた大津波ファンを振り切り、繁華街を小走りで突っ切った。

「聞いたか？春日。男は全員マゾヒストだって」

繁華街の人混みの中を歩きながら、啓一くんはまだ難しい顔をしていた。

「聞いたよ。啓一くん、どう思ったの？」

「いや、奴の意見はどうでもいいし、興味がない。でも、考えようによっては……お前がマゾだから、比良坂じゃなくて、比良坂的な女性像に惚れ込むだけの話なんじゃないのか？」

「僕はマゾじゃないよ。カミリィの地下室での出来事、僕は少しも楽しくなかったんだも

ん」

「地下室？」

啓一くんが訝しげな表情をこちらに向ける。セバスチャンに襲われそうになった悪夢を思い出すと、全身にびっしり鳥肌が立った。

「……いや、な、何でもないんだ。とにかく今日のことは、僕は比良坂とヘルズ・ガールの関連性が知りたかったただけなんだから、僕がどうこうとかはどうでもいいんだよ。そもそも、僕は別に比良坂の事なんて……」

啓一くんは嫌らしい横目で僕を見た。

「……なんだよ、その目。なんか文句ある？」

啓一くんは嫌らしい横目で僕を見ている。

「本当さ、僕は比良坂の事は、どちらかと言えば嫌いだったんだ。嫌なことばっかり言ってくるし、ちっとも協調性が無いし……」

啓一くんは嫌らしい横目で僕を見ている。

「……信じてないでしょ？」

啓一くんは嫌らしい横目で僕を見ている。

こんな顔する奴だったっけ？と、僕は自問した。

「それなら、啓一くんだって……百歩譲って比良坂が好きだったとしても、僕は良いんだよ。それはもう終わった話だからね。だって、比良坂とはもう会うことは無いだろう？でも、君はいい加減、山田さんか藤枝、どっちを選ぶのかはつきりしないとき。いい加減、彼女たちに悪いよ。二人とも本気だよ」

僕が言うと、啓一くんの表情はまるで崖から突き落とされたように、一気にどん底に落ちていった。予想をはるかに超えた彼の反応に、僕は罪悪感すら感じてしまった。

「俺に選ばさないでくれ」

と、彼は情けない声で言ったが、そんなことは僕の知ったこっちゃない。藤枝がもっとしっかりしてれば、藤枝が良いと思うし、山田さんがもっとおしとやかだったら、やっぱり山田さんが良いと、僕は思う。とは言え、そうでなくても二人ともとてもいい女の子なのは間違いないし、どちらを選べだなんて、そんなアンフェアなことは言えない。

「でも、いつかは選ばなきゃいけないよ？」

僕が言うと、啓一くんはもごもごと口ごもって、しょんぼりした顔をした。何と言ったか分からず、僕は聞き返した。

「……俺が結婚して家庭を持って、子供を産んで育てるというのが、自分自身で想像できない」

「なんでさ？」

啓一くんは、少し考えて、こういった。

「人殺しの父親なんて、許されると思うか？」

僕は頭をなにか固いもので殴られたような衝撃を受けた。

啓一くんが、IDEA界から引きずっているもの。  
そして、この僕が引きずっているもの……

## 「暇」

と、大河原先輩から僕に送られてくるメールの9割9分は、このたった一つの2バイト文字だけである。

大抵は、そこから二人して啓一くんの家にしげ込んだり、あるいはぶらぶら町をほつつき歩いたり、面子の集まり具合では麻雀なんかもあるのだけど、最近は少し趣向を変え、大河原先輩の家の押し入れに大量に眠っているレトロゲーム（親戚から貰ったらしい）を引っ張り出して遊ぶのがもっぱらだった。表現のチープさをバカにして笑ったり、理不尽な難易度に腹を立てたり、ものによっては何十年も昔のゲームとは思えない完成度の高さに舌を巻いたり……なんとも懐古的で後ろ向きな遊びのようだけど、これが意外と悪くない。特に、もう一つ楽しさの良く分からないゲームをクソゲー認定するまでのプロセス、「このどうしようも無いゲームを、いかに楽しめばいい？」と試行錯誤をするのが、僕はたまらなく好きだった。

僕と啓一くんはRPGが好きだが、大河原先輩はどちらかというとシューティングゲームが好きだった。山田さんはスポーツゲーム……かと思いきや実はスペランカーの hands、ノームिसで五周六周ぐらい朝飯前だ。藤枝はアクションゲームをプレイさせると手の震えが止まらず、レーシングゲームをさせるとカーブの度に体が傾き、RPGでは「HPが減っていると痛そうだから」と言う理由で必要の無い回復魔法を乱用して、結局もっと痛い目に遭ったりする。鷹取先輩はゲーム全般が嫌いなようで、一度もコントローラーを握ったことが無かった。

話を大河原先輩に戻そう。夏休みに入ってしばらく、先輩からの「暇」メールは毎日のように届いていた。正直、仮にも受験生である僕に、少しぐらいの遠慮があってもいいのでは？とは思うのだけど、一人で家において真面目に勉強するかと問われればそういうわけでもなく、むしろ僕自身が勉強をしないで済む、自分への言いわけ、に先輩のメールを利用しているのだから、お互い様といえればお互い様だった。僕が受験に落ちても大河原先輩のせいなんて出来ないし、大河原先輩だって受け付けてくれないだろう。

ところがある日、先輩からの「暇」メールがぱったりと途絶えた。早くやりかけの、じゅうべえクエストの続きをプレイしたかったのに、二日、三日と大河原先輩からの連絡は無く、ついに一週間ほど経ってから、僕はゲームがやりたいのとは別に、何となく気がかりになって先輩に電話してみた。——どうも先輩は、RPGを作るゲーム、なるものを押し入れから引き当てて、昼夜構わずそれに熱中しているらしかった。

先輩が作るRPG……？僕はとてつもない好奇心にせっつかされながら、先輩の家へ飛んでいった。

「完成するまで見せたく無かったんだけどよ……」

と、大河原先輩は渋りながらも、僕にコントローラーを手渡す。

「どこまで出来てるんですか？」

僕はわくわくしながら訊ねた。

「ダンジョン一個分ぐらいか……いや、ダンジョン……あれ、入れるのかな？……あ、このテストプレイってやつね」

僕はタイトル画面に表示されていた、テストプレイという項目を選択した。画面がゆっくりとフェイドアウトし、いかにもRPGのオープニングに打って付けのファンファーレが鳴り響く。

そして表示される「ハイデッガーのぼうけん（かり）」というタイトル文字。

「へえー。ハイデッガーって……実存主義の人でしたっけ？シリアスですねえ！」

「いや、なんか響きが強そうだから……」

「ええ、まあ、そんなことだろうとは思いましたけど。（かり）ってなんですか？」

「（仮）だよ。まだ決定じゃねえんだよ。いいからさっさと始めろって！」

僕は急かされるままにスタートボタンを押した。

『おはようハイデッガー。きょうは17さいのたんじょうびですよ』

オープニングの、主人公の母親の一言。あからさまなDQ3のパクリだが、まあ、初めて作るRPGなんてものは、きつとこんなものなんだろう。模倣こそ独創の第一歩。僕は○ボタンを押し、会話を進めた。

『行ってらっしゃい』

と、母親。

「……へー？」

僕は画面を眺めながら、思わず呆然とした。

「行ってらっしゃいって……どこへ？」

僕は訊ねた。

「いや、それから城に王様に会いに行くストーリーだったんだけど、城のマップ作るのが面倒だからやめた」

大河原先輩はふてぶてしく言い切る。

「とりあえず酒場で仲間を誘って冒険に出ろよ」

神の声に導かれるままに、ハイデッガーは酒場へ直行する。ちなみに、家から酒場までの道のりに無駄に長い石畳のストロークがあったが、それがこの町にとって一体どういう機能や効果を果たしているのか、僕にはさっぱり分からなかった。建物と建物間の距離感がめちゃくちゃなのだ。

ハイデッガーは酒場にたどり着くと、いの一歩にカウンター向こうにいるマスターに



話しかけた。

『ここはさかばですな』

バーを見渡すと、戦士や魔法使い然とした人物がずらりとカウンターやテーブルにひしめき合い、各々のグラスを傾けている。確かに酒場ですな。

「……この中に、ハイデッガーの仲間がいるんですか？」

僕は先輩に訊ねてみた。

「いや、全員仲間になる。パーティに入れられるのは三人までだから、バランスを考えて選んだほうがいいぜ」

酒場に仲間達はざっと十人以上はいた。先輩がこの中の全てのキャラクターをステータスやらスキルやら魔法やら設定したというのなら、お城を作るのが面倒でも、こういう方向には労力は惜しまない人のようだ。

僕はとりあえず、目の前に座っていたヒゲ面の屈強な戦士に話しかけた。

『あ、わたしですか？』

風貌に似合わない丁寧な言葉遣いと消極的な態度。僕は好印象を抱いた。

選択肢が現れ、迷わず、はい、を選択。

『ちからになりましょう』

あっさりと仲間になるヒゲ面。

「あー、コリンズか……」

と、大河原先輩は言った。

「コリンズは体力や守備力が高いけど、実は見た目ほど力はねえぞ。役割的にはパーティの壁だよな」

大河原先輩が言う。

「じゃあ、次はもっと火力のあるキャラクターが欲しいですね」

僕は迂闊にも、ちよっと楽しくなってきた。

「それなら魔法使いをオススメするぜ。どれが魔法使いかは見りゃわかんだろ？魔法使いっぽい格好してるから」

ハイデッガーは無駄にだだっ広い酒場を歩き、いかにも忍者風の男とターバンを巻いた男の間に座っている、黒い三角帽を被った女の子に話しかけた。

『なんなの？』

コリンズとは打って変わって、魔法使いの女の子は言葉遣いの悪いキャラクターだった。

「感じ悪いですね、こいつ」

「緊張してるんだよ。ハイデッガーはこの町じゃ聖騎士カジユアールの次に英雄血の濃い人間だからな。魔王アモリートを倒すべく運命づけられた人物として、ヴァリアース界じやちよっとした有名人なのさ」

あまりの情報量の多さに僕はついて行けなかった。

『ああ、わたしなんだ？』

魔法使いの少女がそう言う。やる気の無さが少なからず癩に触ったが、面倒なので、  
い、を選んだ。

『わたしマリコ（かめい）。よろしくね』

「かめい？亀井マリコさん？」

僕が冷やかし半分で言うと、大河原先輩は深いためいきをついた。

「……てめーはほんとバカだよな。マリコ（仮名）だよ。マリコかスワンで迷ってるんだよ。分かんたろ？」

「うーん……マリコは確かに変ですけど、スワンって感じでも無いですねえ……」

「……じゃあ、お前はなんて名前つけんのよ」

僕は少し悩んだ。

「顔グラフィックとか見れます？」

「▷ボタン」

▷ボタンを押すと、メニュー画面には凛々しいハイデッガーの顔と、目つきの悪い魔法少女、マリコ（かめい）の顔が表示される。二人の顔グラフィックを眺めている内、僕はふと、妙な違和感を感じた。

「あ、あれ！？コリンズは……？」

なんと、画面にコリンズの顔が無かったのだ。大河原先輩ははっとした。

「ああ、イベントの中に、パーティに加入、のコマンドつけるの忘れてたんだな、きつと。後で直そつと」

先輩は軽々しくそう言うが、戦士コリンズはパーティにいなければ、酒場の席からも消えている。先輩のうっかりで、彼の存在そのものが完全にこの世から消え去ってしまったのだ。

「酷いなあ……」

「いいからほら、マリコの正式名称を教えてくださいよ」

「えーと、そうですね……魔法使いだから、スワンとかマリコとかじゃなくて、もうちょっと悪魔じみた、悪そうな名前がいいんじゃないですか？」

「例えば？」

「ちなみとか」

僕が言うと、先輩は、ぶーっ、と吹き出した。

「ダメダメ。アホは俺のゲームには参加できねーんだよ」

僕と大河原先輩はけたけた笑った。

「じゃあもう、マリコが良いですよ。よくよく考えるとマリコのマが魔法の魔っぼくて良い感じですし。次行きますね」

あっさり流され、どこか不満そうな大河原先輩。僕はマリコから二人挟んで向こうにいる、ターバンを巻いたおじさんに声をかけてみた。——マリコと話している最中から、僕

は彼が気になって仕方がなかったのだ。

『ナマステ』

と、ターバンは自国の言葉で挨拶をしてくれた。

『わたしにしごとをくれ。くににしよくりようをもつてかえらねば……みんなうえてしま  
うからな』

「え……？」

と、僕は思わず声を漏らしてしまった。

「なんでこの人だけこんな深刻なストリーを抱えてるんですか？」

僕が訊ねると、大河原先輩はどういうニユアンスか良く分からない笑い方で笑った。恐  
らく、ターバンを見ただけで広がった空想を、後先考えずに書いただけだろう。――そし  
て、この設定は恐らく今後二度と活かされないと、僕は断言する。

ターバンが連れて行ってくれとせがむので、僕は、はい、を選択した。ターバンの人物  
の名前は、ガンジー、だった。

「……えーと、コリンズがけつきよく仲間にならなかったから、マリコと、ガンジーと、あ  
と一人選ばなきゃ」

僕はガンジーの隣にいた金髪の碧眼の、なんとなく誰かに似た少女に声をかけた。

『なによ。わたしはストレスはっさんにここにいるだけだからね』

何となく聞き覚えのあるセリフ。

僕は思わずぎよっとした。

「こ、これって……」

僕は先輩に訊ねた。

「ああ、そいつ？そいつは、比良坂。なんか見た目、比良坂っぽいじゃん？」

先輩がそう言って、僕は思わずほっとした。僕は自分がまた何かのキャラクターに（そ  
れも、大河原先輩が作ったキャラクターに）無意識に比良坂を当てはめてしまったのか  
と、心底うろたえたのだ。でも、今度は本物（？）らしい。

『まあ、おもしろそうだしついていってあげる』

強制加入かよ、と僕は心の中で突っ込んだ。

「あー、でも、どうだろうな。比良坂は物理攻撃に特化されたキャラクターだから、ガンジ  
ーとかぶっちゃまってるなあ」

大河原先輩は言った。

「物理攻撃？本物の比良坂は確かに攻撃的でしたけど、物理も魔法も両方こなしてしまし  
たよね？」

「いや、まあ、女の物理攻撃担当がいなかったからな。IDEA界の事は別にどうでも……  
……」

「せっかくなんですから、そこは忠実に行きましょうよ。なんか納得いきません」  
僕が反論すると、大河原先輩はあからさまに嫌そうな顔をした。

「拘るなあ……どうでもいいんだよ、どうでも」

「どうでも良くないですよ」

「女の魔法戦士はヨランダで十分なんだよ！」

「ヨランダ……？じゃあ、ヨランダが物理攻撃専門にいけばいいでしょ？あと、ガンジーが物理攻撃得意なわけないし」

「知るかよ！面倒臭いじゃんか！一回作っただのにまた設定し直すなんて」

「それが創作ですよ！」

大河原先輩は、おうおうおう、と江戸っ子みたく捲し立てた。

「『それが創作』ときたもんだ！じゃあお前が何か作ってみろよ！お手本を見せろ！お前の創作とやらを俺に見せてみやがれってんだ！ちよつとでも出来が悪けりや鼻で笑ってやっからな！」

大河原先輩の剣幕に負けじと、僕は「いいですよ！」と言い返した。

「それじゃあ……ソフト貸してくださいよ」

「やだよ、バーカ」

……作ってるゲームと同じく、この人はとことん理不尽だ。

家に帰って調べたところ、どうもこのRPGを制作するゲームにはPC版があるらしい。次の日、僕はさっそくPCショップに向いて件のソフトを購入した。

まずこのPC版は、コンシューマー版に比べて素材の面で圧倒的に有利だった。コンシューマー機は備え付けのサンプルデータしか使えないけど、PC版ならグラフィックだろうと音楽だろうと、素材ファイルさえあれば簡単に追加できる。表現力の面に雲泥の差があった。そもそも、ゲーム機のコントローラーでゲームを作るだなんて、かったるくてやってられない。

僕はさっそく、ソフトの使い方を学ぶために肩の力を抜いて短編を一つ作ってみることにした。舞台は日本。主人公は学生で、一人旅の最中に泊まったとある旅館で迷子になってしまうのだ。旅館の中は広大かつ入り組んでいて、そこら中に化け物が彷徨っていておまけに出口がどこなのかもさっぱり分からない。主人公は外の世界へ脱出するために理由も分からず戦い続けるが、旅館の外の事をあれこれ考えるうちに、本来に旅館の外にはそれほど価値のある世界が広がっているのかどうかと疑問を持ち始める。そして、旅館の中に住み着く少女と出会い、彼女からここに住む事になった経緯を聞くと、彼は衝撃とも言えるほどの共感を得るのだ。結果、主人公は出口まで辿り着くも、最終的にはこの旅館で一生過ごす事が自分にとって最良の結末だと自覚する。そして、永遠に旅館の住人となって……おしまい。

ストーリーがまとまると、僕は自分のイメージ通りの世界を構築すべく、ネット上に散在する素材サイトを回りにまくった。このソフトのコミュニティは僕が思っている以上に

広くて、フリーのグラフィック素材や音楽素材はネット上にわんさと落ちていた。ただし、どれも傾向は似ていて、基本的にはRPGとして一番汎用性のあるファンタジーものがほとんどだった。中にはわざわざ最初からサンプルとして入っている素材を焼き回したものもあり、それが流行ってすらいた。僕はそれらの素材を眺めるうち、自分のゲームがどちらかと言えば少数派の部類に入るのだと、自覚させられた。

素材探しのついでに、先人達の作ったゲームもいくつかやってみた。オーソドックスで堅実な面白さを持つ作品や、あるいは独創性が爆発した作品もあるにはあったけれど、それらは全体のほんの一部に過ぎず、大半は何か市販のゲームの三流コピーや、奇を衒いすぎてエンターテイメントを忘れた作品ばかりだった。何が面白さの一線を引くのか、正直なところ、僕にはよく分からない。「結局は作者のポテンシャル」なんて言葉で片付けるには惜しい、ほんの少しのアイデア、あるいは努力で、見違えるほど面白くなりそうな作品も沢山あったのに、僕はそういう作品を見るたび、何か歯の間にものが詰まって取れないような気持ちになったのだった。——あるいは、それは途方もなく大きな一歩で、そして、全てなのかもしれない。

主人公のグラフィックはあっさり見つかった。どこにでもいる、普通の青年だ。こういうストーリーは、主人公が普通の青年だからこそ、意味があるのだと思う。

ヒロインは逆に、どこか浮世離れた、不思議な女の子が良かった。現実で受け入れられない、無闇に自尊心の高い少女。だからこそ、旅館に——自分の殻の中に閉じこもる。外世界に自分の居場所が無いなら、それならいっそ、可も不可もない自分の世界にひっそりと生きて、誰からも疎まれず、咎められず、誰を疎うことも無く、咎めることも無く、そして、愛することもなく……

「ちよつと待てよ……?」

と、僕はPCの前で呟いた。

「そんな性格のヒロインが……果たして、突然現れた主人公を何の苦もなく受け入れるだろうか?自分の世界に異物が混じって、それをすんなり受け入れるだろうか?それよりはむしろ、主人公の姿を見た途端、気が狂ったみたいに主人公を憎み、虐げて、自分の世界から追い出そうと躍起になるんじゃないだろうか……?いや、でも、望んで一人になる人間なんていないよな。本心は寂しいはずだろうし……だったら……もし自分の世界で主人公のような青年と出会ったら……どうする?」

僕は椅子から立ち上がり、部屋の中をうろろしながら、作品の事をいろいろと考え始めた。主人公がAと考えた場合、少女もAと考えていけば、殺し合いになる。でも、主人公がBと考えた場合、少女もBと考えていけば、二人は生涯を永遠に共にするだろう。じゃあ、主人公がAと考え、少女がBと考えた場合は?Cなら?Dなら?Eなら?Fなら?Gなら?Hなら?Iなら……?

当初のブラックなハッピーエンドが、あっちへ行き、こっちへ行き、ついには僕は、自分が何を決断しても間違いのような気がしてならなかった。これは僕一人じゃ決められない

い。決められっこない。僕が一番望む結末を選べばいいのだろうけれど、それが一番分からない。

僕は思わずぞっとした。まるで、僕自身がこの旅館に囚われた主人公のようだ。出口がどこにも見つからず、あっちへ行き、こっちへ行き……

「こりゃ、手に負えないぞ!」

僕は眩き、急いで鷹取先輩に電話をかけた。困った時はこの人が一番良い。

十数回コール音が鳴り響き、少し眠たそうな「もしもし?」という声が聞こえた。

「なに、春日くん。こんな時間に……」

僕は時計を見てびっくりした。針は夜中の三時を指していた。

「あ、その……夜分遅くにすみません、鷹取先輩」

「……何かあったの?」

「いえ、何かあったって訳じゃ無いんですけど……その、迷子になってしまっ  
「また!?!」

鷹取先輩は電話の向こうで仰天した。

そう言えば、以前にもこんなシチュエーションがあったっけ……

「どこで?場所は?」

「いや、自宅なんですけど……」

「……自宅?」

「はい」

「……良く分からないけど、明日で良いかしら?」

鷹取先輩がいらついているのを、僕は声の向こうからひしひしと感じた。

ちよっとまって下さい!と僕は慌てて先輩を引き止める。

「先輩は……えっと……もしもし?」

「なに」

「あの……例えば、例えばですよ?例えば、自分の世界に誰かが現れた場合、先輩  
たらそれをどうしますか!?!」

「自分の世界に……」

と、鷹取先輩は眩く。

「はい!」

「……どうするか教えて欲しい?」

「はい、是非!」

僕が言うか早いか、受話口からツー、ツー、ツー、という空虚な音が聞こえた。

明日、先輩に謝ろう、と僕は思った。

——とある定食屋での話。

「いまRPGを作ってるんです」

と、僕は石神先輩と鷹取先輩に向かって切り出した。——僕は二人とお昼を一緒させて頂く御光栄に預かったのだった。

「最初は旅館の中をダンジョン仕立てにして、迷宮探索っぽくやろうとしたんですけど、考えている内にアイデアばかり広がって行っちゃって……で、さっぱり分からないんですよ。旅館も良かったんですけど、本当言うと、そこは現実がない、理想郷である必要があるんです」

僕の話に耳を傾けながら、石神先輩が頷く。鷹取先輩が興味無さそうに窓の外を見ているのが、僕は少し残念だった。他人の興味を引けないのは、題材として弱いのか、あるいは話の持つて行き方が悪いのか。

「ねえ、先輩。理想郷ってなんですか？」

僕は訊ねた。

「食っていける場所さ」

石神先輩は即答した。鷹取先輩が、ふふ、と小さく笑みを零す。

「……そんな単純なものでですか？」

「だからこそ、真理だろう。そもそも、理想郷、なんて漠然とした言葉を提示されても、こちらはそのような風にしか答えようがない」

石神先輩は言った。それももつともなのかもしれない。

「でも、その……物質的な事じゃなくて、精神的安住という意味です。食っていけるのは日本だってどうとでも食っていけるでしょう？でも、精神的安住にはまるで程遠いです」

「日本にいたって、食うためには働かなきゃならんよ」

「じゃあ、働かずに食べられたら、人に精神的苦痛は……」

「ありえないよ、そんなもの。なあ、鷹取？」

石神先輩が訊ねる。そうかもしれないわね、と鷹取先輩は言った。

「地球というのは巨大な食堂だ。食堂内は常にどこも満席状態で、みながみな自分だけは美味しい飯にありつこうと、死にもものぐるいで自分の席を確保しようとするのさ。恐らく、理想郷というのは、全員に座席が行き渡った状態の事を指すのだろう」

石神先輩が言う。そうなのかな、と僕は思った。

「……それに、人々が心のどこかで理想郷を求める以上、それは形作られつつあるわ」と、鷹取先輩は言った。

「隙のない、パズルのような世界よ。機能としてのみ存在する、平等かつ無個性な人々。すみずみの至る場所にまで管理の行き届いた社会。都市や全体の完成度だけが優先され、例外は一切許されない」

「それが理想郷なんですか？」

「まあ……不幸もなく幸福もなく、これ以上は何も起こり得ない、終わった世界、ね」

「終わった世界……」  
僕は鷹取先輩の言葉をなぞった。それが理想郷だと言うのに、なんて退廃的な響きなんだろう。

ウエイトレスが注文した料理を運んできた。石神先輩にはサーロイン・ステーキ定食、鷹取先輩にはネギトロ丼、僕の目の前には豚のしょうが焼き定食が、それぞれ置かれていった。「頂きます」と誰にともなく呟いて、豚のしょうが焼きを一口食べる。焼きすぎで少し焦げ臭く、お世辞にも美味しくは無かった。

「……つまり、理想郷っていうのは」

僕はほとんど頭の中を整理せず、言葉を切り出した。

「社会が一人つきりで自分の世界に引き籠もるようなものですか」

僕がそう言うのと、二人の先輩は一瞬顔を見合わせ、くすくすと笑い始めた。僕は恥ずかしくなって、自分の言葉を取り消したい衝動にかられた。

「そうね。春日くん、たまには外に出なきゃダメよ」

「分かってますよ！出てますよ」

僕は目の前のグラスを手にとって、水を一口含む。

「比良坂の事が忘れられないんだよな」

石神先輩が言った。僕は思わず、口の中の水を吹き出す所だった。

「あら……」

と、鷹取先輩はそう言ったきり、何も言わなかった。先輩は無言でしばらく僕の方を見つめて、なにか納得したように、うんうん、と頷いた。

「……なんですか」

僕は堪えきれず、先輩に訊ねる。

「いえ、別に。良かったな、と思って」

「なにがですか」

鷹取先輩は石神先輩の方にちらっと目配せしたが、石神先輩も鷹取先輩がなんの合図を送っているのか、良く分からないでいるようだった。

「……何だ？」

石神先輩が鷹取先輩に訊ねる。

「……なんでもないわ」

「気になりますよ。教えてください」

「なんでもないったら」



「オカシイでしょ、そんな……」

「春日くんの事を誤解してたのよ」

と、鷹取先輩は言った。

「ひょっとしてこの子、男の人が好きなのかなって……」

僕の言葉を遮って、鷹取先輩はぶっちゃけた。

「な、なんで!？」

僕は、自分でもびっくりするような声で叫んだ。

「ごめんなさいね」

鷹取先輩が謝る。

「いや……な、なんでですか!？理由を説明してください、理由を!」

「理由という程の理由は無いけれど、なんとなく……印象で」

石神先輩は自分の方へ僕たちの視線を向けるよう、わざとらしい咳払いをした。

「……大丈夫さ、鷹取。春日はゲイじゃない」

至って生真面目な顔で喋る石神先輩。

鷹取先輩はもの問いたげな顔で彼の方を見つめた。

「ゲイかどうかは、肌質で分かるのだ。春日はゲイの肌じゃない」

肌質？

僕と鷹取先輩は一瞬考えて、ふーんと納得したふりをして頷いた。でも僕は、石神先輩がなにを言いたかったのかさっぱり分からなかった。肌質って、何のことだろう？

——藤枝の家での話。

「かと言って、無闇に外に出るばかりが、本当にその人の為になるかっていうと、また別問題だよな」

二人の先輩と話していたような事を（ゲイ話は除く）藤枝に持ちかけてみたところ、彼女は珍しく真っ向から自分の意見を唱えたのだった。

「と、言うത്?」

僕は訊ねた。

「だって、人によっては家の中で本を読んでいた方が、外に出る何倍も多くの事を学べるんだもん」

「つまり?」

僕はもう一度訊ねてみた。

「いや、だから……そりゃあ、最終的に人は食べるために活動するんだろうけど、そのためにわざわざ外に出るんじゃないやなくて、あえて家の中で活動することが、その……場合によっては、食べることに繋がるような気が……」

藤枝は自分の考えを上手く言葉に出来ないで、何度も詰まりながら話す。

「それってどういう事？」

僕は面白くなって、重ねて藤枝に訊ねてみた。

「その……目的……そう！目的を持って家の中にいるのは、それは引き籠もりとは違って、もっと前向きで建設的な事だと思うんだ。だから、場合によっては外をぶらぶらする事が逆に……その人にとっての、逃げ、というか、消極的な……」

「……つまり？」

僕は訊ねる。

「一人で家の中にいるのだって、それはそれで結構辛いんだよ！辛い事の先には……きつと、良いことがあるんだと思う。目的に向かう途中、いろんな苦難が形を変えて待っているんだろうけど……それにはやっぱり、真っ向から立ち向かうべきだと思うんだ。それが本当に自分のためかどうかは自分自身にしか分からないし……本当は、分かっているんだと思う。それをあえて分からないフリをして、誤魔化すから……だから、目的はだんだん遠のいて……自分がどこへ向かっているのか、今どこにいるのか、分からなくなっちゃうんだ」

「つまり？」

「つまり……つまり……つまり、外に出るかどうかは、自分で判断しよう！ってことだよ」  
藤枝はふわふわと頼りない理論を展開していたが、まとめだけを聞いても、彼女はやっぱりなんだか良く分からない事を言うのだった。

「藤枝らしい意見だよ」

と、僕は言った。

「……バカにしてるでしょ？」

そんな事無い、と僕は言った。

「……だって、春日くんが……何を知りたくてそう言うことを聞いているのか、全然わかんないんだもん。最近の春日くんは自分の事に夢中すぎるよ」

それはそうかもな、と僕は思った。

——啓一くんとの話。

「お前は自分の理想郷を作りたいだけさ」

と、啓一くんはテレビのチャンネルを変えながら、そう言った。テレビは忙しなく、次々と画面を切り替えていったが、二人とも意識は全然別の場所にあった。

「閉じた世界で、二人つきりで比良坂に会いたいただけなんだ。それを自分自身で認めたくないだけだろ？」

「……そんなことないけど……でも、もしそうだとしても、それが創作でしょ？」

僕は言った。啓一くんはチャンネルを1から順に繰っていたのだが、ふと何かの映像がテレビに映ったのを見ると、慌ててチャンネルを逆回しに戻した。啓一くんのアンテナに

引っかかったのは、何という事はない、古いクレイアニメの再放送か何かだった。粘土で出来たもぐらとヘビが、人には理解できないが、一応は彼らの言葉らしきもので、何かぎやあぎやあと言い争いしているシーンだった。

「創作なんて、クソ食らえじゃないか」

と、啓一くんが言った。彼がこんな言葉で何かを否定するのは、珍しかった。

「別にお前のやっっている事を否定する積もりはない。お前には創作が必要で、あるいは俺自身にも必要で……やはり、人間には誰にも必要なものだしな。ただ、そんなものは全部クソだよ。大体、クソなんだから」

「クソだからクソなの？」

「違う。クソだし、クソなんだよ。ただ、世の中のいたる場所に転がってるクソの、ほんの一つに過ぎないけどな。しよせん、馬鹿なのさ。人間なんて」

啓一くんがテレビの電源を落として、リモコンをテーブルに置くと、突然現れた静寂が、包み込むように部屋の中を支配した。

「……石神先輩が、『理想郷は、誰もが食べられる世界だ』って言ってたよ。誰もが何かを食べられたら、創作は必要無いと思う？人間は馬鹿じゃ無くなる？」

僕は訊ねた。

「別腹だろ、画に描いた餅は」

啓一くんはそう言うのと、疲れた様子で、まるで倒れ込むようにテーブルにもたれ掛かった。

彼はじつとテーブルに俯せになったまま、呼吸にあわせて肩だけを上下させる。

「……啓一くん？」

僕は彼に呼びかけてみた。何度か呼びかけて、肩を揺さぶるが、彼は全く反応しなかった。

……しばらくして、（信じられないことに）本物のいびきが聞こえて来たので、退屈になった僕は仕方なくテレビの電源を入れた。彼が見ていたクレイアニメは、もう違う番組に変わっていた。

——山田さんの話。

「で、どこまで出来たの？そのゲーム」

山田さんの買い物に付き合っ、僕たち二人は繁華街をほっつき歩いていた。——毎日毎日、僕はこんな事ばかりしているのだ。

「……どこから作ってどこまで作れば良いか、分かんないんだ」

「一番下でいいじゃん。んで、天国向かって進んで行くの。理想郷って、要するに天国の事でしょ？あるいは、いろんな天国を転々としていく、みたいな」

山田さんは特に何も考えずにそう言ったのだろう。でも、僕は発想としてはなかなか悪

くない気がした。

「最後は？」

僕は訊ねてみた。

「最後？最後は……うーん……最後は、ゲームの外！天国巡りをするうち一周して、けっきよく現実に戻ってきた、みたいなき……なはは。ダメかな？」

「いや……全然ダメじゃないと思うけど……山田さんはやっぱり凄いな。じゃあ、ゲームの中の女の子は？」

「知らない。置いてけぼりでしょ。ゲームのキャラクターが、ゲームの外に出られるわけないじゃん」

「出られるさ。コミケとかにいっぱいいるし」

ははは、と山田さんは笑った。

「むしろ、僕たちの方が現実に置いてけぼりだったりして」

「……ま、ちょっと疲れてる時は、そんな風にも考えちゃうよね」

と山田さんが言った。――僕は疲れているのだろうか？

「春日くん、比良坂さんに会いたい？」

と、山田さんが訊ねた。

「……会いたい、と思う」

僕は言った。

「本当は存在しない女の子かもしれないのに？」

うん、と僕は言った。

「それが不思議なのよねえ、私。ねえ春日くん、もし私とここでキスするか、比良坂さんと会えるかって言ったら、どっちとる？」

「……え？」

と、僕は聞き返す他なかった。

山田さん自身には別の意図が――恐らく、空想の女の子と現実の女の子、どっちが良い？的な質問だったんだろうけど――あったのだろうけど、言ってから、自分の言葉を吟味して、彼女は顔を真っ赤にするのだった。自分じゃなく、例えば藤枝とか、鷹取先輩とか、その辺の他人の名前を出せばこんな空気にはならなかったのだろうけど、それが許せないのは、彼女の良いところでもあり、生真面目すぎるところでもあり……

「……う、ウソウソ！冗談！なんで私とキスなのよ、ホント。嫌がらせかつーの」

山田さんは顔を背けて、照れ隠しにそう言った。

なんなんだろう、この居心地の悪さは。

……それにしても、と僕は思った。

それにしても、僕はどっちを取るだろう？山田さんか、それとも現実には居っこないであろう、比良坂か……別に山田さんの事は嫌いじゃないし、友人としても、女の子として

も、むしろけっこう好きだと思う。単純に可愛いし。

でも、僕が比良坂の事を考えるのは、もつと何か……山田さんの事を考えるのとは、別の感情のような気がする。永遠に手が届かないから、逆に心惹かれるとか……あるいは永遠の理想とか……いや、違う。違う気がする。僕は……単純に……空想というものに、憧れ過ぎてるのかもしれない。だって、僕はIDEAで顔を会わせていた時、比良坂の事をほとんどどうとも思ってたはずだもの。IDEA界が消滅し、空想が空想としてあるべき姿に戻った今、空想がもつと力を持っていればなんて考えて……ひよつとすると、僕はまたIDEAでヒーローになりたいだけじゃ……しかし、変な事を聞くもんだなあ、山田さんも！

と、その時。

「春日くん！」

と、山田さんの叫び声が聞こえた。

気がつけば、山田さんは僕の遙か後方、横断歩道の手前で、こつちを向いて叫んでいた。彼女が立ち止まっていたのに気づかず、僕は考え事をしながら、一人で歩いていたのだ。

ぎよつとした瞬間、一台の白い車が、けたたましいクラクションを鳴らしながら突っ込んできた。僕は避ける間もなく、全身を何メートルか——山田さん曰く3m——吹っ飛ばされて、意識を失った。

考え事ばかりしてるから、こういう目に遭うんだ。

次に気がついたとき、僕は病院のベッドにいた。日付は一週間進んでいた。

医者の話によると、軽い外傷の他に、大腿骨の骨折、右肩の脱臼、そして右耳の聴力が麻痺しているらしかった。骨折の方は時間とりハビリが解決してくれるらしいが、右耳の聴力はまず一生このままだという。担当医は「若いから、まだまだこれからさ」とありきたりな言葉で励ましてくれたが、右耳の聴力を失った人間の右側に立って言っている時点で、本当の気配りか、それとも業務用の文句かどうかなんて一目瞭然だ。――担当医さんには悪いけど、そりゃ、神経質にもなるさ。

僕が意識を取り戻してから最初にお見舞いに来てくれたのは山田さんだった。彼女は罪悪感を感じているらしいが、もちろん、僕はそんな風に考えたこともない。一点の曇りもなく、全ては僕自身の責任なのだから。

「いや、全く聞こえない訳じゃないよ」

と、僕は山田さんに向かっていった。

「少しは聞こえるんだ？」

彼女は何か、微かな希望を見つけたようにでそう訊ねる。

「なんだろうな……耳鳴りのする綿、か何かをぎっしり詰め込まれている感じ」

「耳鳴り酷いの？」

「うん。けっこう」

けっこう、というのはウソで、正直な話、僕の頭は耳鳴りで割れそうだった。こんなに酷い耳鳴りとほんの少しばかりの聴力を残しておくぐらいなら、いっそ完全にオフった方がマシだ。

「これは聞こえる？」

山田さんが右の耳元で、普段話しているぐらいの声で喋りかけた。

「聞こえるよ」

僕は言った。

「これは？」

山田さんはちょっと声を落としてそう言った。微かだが、なんとか聞こえる。でも、次に彼女が何かをほとんど囁き声で言ったとき、僕は耳鳴り以外に何一つ聞こえなかった。山田さんはがっかりしていたけど、それなら試さなきゃいいのに、と僕は思った。

「あ、そうだ。大河原先輩がこれを春日くんにつけて」

山田さんは、病室のテーブルに置かれた紙袋を指さした。

「完成したからとかどうとか……なにか、ゲームの本体とソフトが入ってるみたい」

「ホント!? 完成したんだ、ハイデッガーのぼうけん!」

僕は驚きのあまり、思わず大きな声を出した。まさかあれが完成するなんて!

「なにそれ?」

「ハイデッガーのぼうけんさ。ハイデッガーは騎士カジュアールの次に英雄血が濃いんだよ」

「全然わかんないし」

僕は気の抜けた笑い声をあげ、山田さんもつられて笑った。

それからしばらく、何と云うこと無い会話を交わして、山田さんは帰っていった。彼女は最後に何か言おうとしたけれど、それが言葉になることは無かった。彼女は賢い人だから、彼女が守った沈黙はきつとどんな言葉よりも優れたものだったのだろう。――大体、慰めなんてものは、いつだって言われた相手を余計に苦しめるものなんだ。

ぽつん、と一人病室に残される僕。日中はそれでも廊下から何か慌ただしい物音や患者同士の世間会話のようなものが聞こえていたが、日が暮れるにつれ静かになっていって、消灯時間が過ぎてしまうと、右耳の耳鳴り以外に何一つ聞こえる物音はなかった。

時間だけが僕には用意されていた。好む好まぬに関わらず、どうも僕は考え続ける運命にあるらしい。それならば、と僕は諦めて、車に撥ねられる前に頭の中にあつたような事をもう一度考え始めようとした。しかし、思うようにいかない。記憶を辿る糸の、切れっ端も見あたらない。まるであのか、事故のショックで頭の中身の一切をぶちまけてしまったみたいに、何を考えてこうなったのか、そして何を考えるべきだったのか、僕は何一つ思い出せなかった。

どうせ下らない事さ、と、僕はむしろ清々しい気分で独りごちた。きっとそうに違いない。でなきゃ、誰が忘れるもんか。

ベッドの上の長い夜。白い壁と白い天井。

考える事の一つもない僕は、頭の中まで真っ白になった気がした。たまに日常生活の破片が脳裏にちらついて、下らない事にほくそ笑んだり、恥ずかしい事を思い出して舌打ちしたり、これからの事を考えてうんざりしたり、とにかく記憶の上っ面ばかりをなめ回しては、それ以上深い考えに発展することは無かったが、ふとした拍子に、僕は昏睡状態の時にも夢の一シーンを思い出した。一つのシーンが思い浮かぶと、芋蔓式に他のシーンも思い出す。しかし、それらに関連性は無く、荒唐無稽で、おまけにその一つ一つがあまりに臆気すぎて、中には本当に見たのかどうか分からないものもあった。

中でも特に僕が強烈な印象を受けたのは、どこかで見たことのある、懐かしい女の子の夢だった。名前が分からないければ顔も分からない、<sup>3</sup>「こんな感じの女の子」というのは漠然と頭の中にあるのだけど、その印象もはやほとんど失われてしまっている。

おまけにその女の子が別に何かをした訳でもなく、僕とほんの二三会話を交わしただ

けで、でも、そのわずかな会話が僕の人生を根っこから掘り返すような、重要な意味合いを含んでいたような気がする。僕は何とかして言葉の断片だけでも思い出そうとしたが、思い出そうとすればするほど、夢の本当の印象からは遠のき、薄っぺらな自分の創作に変わってしまうのだった。

記憶の断片ともどかしい格闘しているうち、ついには最初の印象の強烈さまでも失われ、夢は埃のようにどこかへ散ってしまった。——恐らく、もうこの夢の事を思い出すことは無いし、二度とこれと全く同じ印象を味わう事も無いのだろう。夢の一切をノートか何かに残し留められれば、どれだけ素晴らしいだろう、と僕は思った。こればかりは、子供の頃から、本当に残念な事の一つだ。

一週間寝続けたというのにまだ体は疲れているらしく、僕はうとうとと浅い眠りについた。何の意味も感情も無い、シユールな夢をいくつか見て、そしてふと真夜中に目を覚ますと、真つ暗闇の中、眠る前と同じ馴染みのない白い部屋が僕を待っていた。しかし、どうも先ほどと何かが違う。

誰かいるぞ、と僕は思った。そんな心配がするのだ。僕は首のコルセットをしたまま窮屈な頭を必死に起こして、部屋の中をざっと見回したが、部屋には誰もいなかった。

「誰がいる？」

返事は無い。僕の声がまるで真つ白な壁に吸い込まれてしまったように。

「……いるんでしょう？」

しばらくして、僕はもう一度訊ねてみた。

すると、窓の閉め切っているはずのカーテンが、もぞもぞと動き始めた。

「だ、誰だ!？」

ただならぬ恐怖心が背筋を走り、僕はぎよつとした。

と、その時、ひよっこりとカーテンの陰から姿を見せる一人の少女。

僕は自分自身の目を疑う他なかった。

「……やっぱり、僕はまた夢をみているんだ!」

僕は思わずそう呟いた。

少女は、あの、ドミニク、の小日向比奈子だったのだ。

「何言ってるの。キミはずーっと夢を見てるでしょ」

比奈子が悪戯っぽい笑顔で言った。

「IDEAに心を残してきた少年、春日陸!」

まるでどこぞの舞台か何かのように、道化っぽく僕の名前を言う比奈子。

「……僕がIDEAに何を残してきたって？」

「心の半分を、だよ」

「もうIDEAは消えたんだ。僕が残してきたものなんて何も無いさ」

「その割には、キミはまだヒーローになりたがってるし、居もしないヒロインを求めている



るじゃん」

「そんなこと無い」

「同じ場所ばかりぐるぐる彷徨って、永遠に届かない夢ばかり追い続けるんだよ。降りる駅を忘れて、どこにも行き着かない回送列車に乗ってるんだ」

「勝手に言ってる！」

僕は怒鳴った。

「どうして僕が見えるの？ここは現実なのに」

「ここが夢だからさ！」

「キミは今、起きてるのに？」

「まだ眠ってるんだよ！お前が帰ったら、僕は目を覚ますよ！」

「ホントに？」

「もういいから、さっさと帰ってくれ！」

僕が怒鳴りつけると、比奈子はけたけたと人形のように笑った。

「じゃ、またね」

「さっさと帰ってくれ！二度と会うもんか！」

比奈子は笑ったまま、悠然と僕の前を通り、ドアを開けてゆっくりと病室を出て行った。ドアを閉じきる直前、そつと病室の中を覗いて笑ったが、僕が顔を背けると、ばたんとドアが閉じられた。

比奈子？なんで比奈子がここに？

僕は事故のショックで頭がおかしくなったのだろうか？

そしてやってくる、酷い右耳の耳鳴り。

僕は頭の中がぐしゃぐしゃになって、何も考えられなかった。

(ダメだ、こんな場所に一人でいちゃ！)

僕は思った。誰か、誰でも良い。とにかく、誰かに会いたい。

嫌な人間でも、憎い人間でも、取るに足らない人間でも、関わり合いたくない人間でも、とにかく、出来ることなら、誰かに会いたい……

どこかから鳴り響くラジオ体操の音。

気がつけば僕は、白く輝く朝を迎えていた。

眠っていたのか、それとも起きていたのか、ぼんやりとして良く分からない。あるいは、あの比奈子とのやりとりも夢だった気がするし、やはり、現実だったような気もする。時計を見ると、時刻は七時を指していた。

ベッドから起き上がれない僕は、看護師さんを選んでテレビにゲーム機を接続してもらった。ソフトを起動し、テストプレイの項目を選択する。画面には、ハイデッガーのぼうけん<sup>3</sup>の文字。――(かり)の文字は消えていた。

酒場で仲間にしたのは、やはりコリンズ（今度は彼も冒険に参加してくれた）、マリコ、そして比良坂の三人。ハイデッガーたちが最初に向かった場所は近くのダンジョンで、そこにはおびただしい数のスライムが異常繁殖していた。エンカウントはほとんど一歩ごとに起こり、出てくるスライムは赤、青、黄色、緑の四色。ダンジョンの奥地にいるボスライムに辿り着くまで三時間はかかったし、ハイデッガーたちはその間、何百というスライムを蹴散らしたのだった。そして、いよいよボススライムとの対決……と、思いきや、ボススライムは「ゲームばっかりしてんじゃねーぞ！」と怒鳴るや否や、そそくさとマップ外に逃亡し、そして画面はフェイドアウト。何を解決したわけでもないのに、やたらと感動を煽るような臭いBGMに、エンディング・ロールが流れ始めた。

僕はあまりの馬鹿馬鹿しさに、大笑いしてしまった。何がそんなに可笑しいのか、自分でも良く分からなかったけれど、笑って、笑って、笑い倒して、病院に来てからずっと曇っていた気分がようやく少し晴れたような気がした。

と、その時、ノックも無しにドアが開いた。

「楽しそうだな」

と言いながら、啓一くんが病室に入ってきた。

「いや、くだらないよ。ほんと、くだらない」

僕は言った。

「じゃあ何で笑うんだ？」

啓一くんは訊ねたが、僕は左右に首を振って何とも答えなかった。

続いて鷹取先輩が入ってきた。鷹取先輩は病室に入りながら、後ろにいた誰かと喋っていた。先輩の後ろにいた人物は病室に入りたがっていないらしく、ドアの向こうでござねるのを、鷹取先輩が必死に説得しているのだ。

誰？と、僕が啓一くんに訊ねようとした瞬間、鷹取先輩にほとんど無理矢理引っ張られて、後ろの人物が部屋に入ってきた。僕はその人物の顔を見た瞬間、全身にびっしりと鳥肌が立ち、目の前がぐるぐると回って、少しでも気を許せばそのまま失神してしまいそうになった。目の前の現実を理解しようと、深呼吸をし、冷静を保つ努力をする。失神こそしなかったものの、僕の頭の中はすっかり混乱して、何がなにやらわけが分からなかった。——ここが現実なのか、それとも夢の続きなのかさえも。

「……ちよっと、大丈夫なの、この人？」

と、最後に入ってきた人物——比良坂ヨミが、あからさまに狼狽する僕の顔を心配そうに覗き込んだ。

激しい耳鳴りが頭痛を伴って襲ってくる。

「う、ウソだ……比良坂が……なんでここに！？こんなの、夢だ、夢に違いない……！」

僕はほとんど無意識にそう言った。

「おい、しっかりしろ」

啓一くんが僕の頬を叩くが、僕は彼の言葉が理解できなかった。

「失礼ね！久々に旧友の顔見て、まるでお化けでも見たみたいに目回すなんて！言ったでしょ？私も灰色ヶ原に住んでるって」

比良坂の懐かしい、喧嘩腰の口調。

僕はさすがのように鷹取先輩の方を見た。鷹取先輩は顎に手を当て、難しい顔で何かを考えている。

「……た、鷹取先輩！」

僕は言った。

「ここは……ここは、夢なんですか？それとも、現実!？」

鷹取先輩が僕に向けた視線が思いのほか鋭いものだったので、僕は思わずぎくりとした。

「何を言ってるの？春日くん」

毒気を含まれた笑みを作って、鷹取先輩がそう言った。

「これはみんな、あなたがやったことじゃない」

……、僕がやった、こと？

僕が一体、何をやったって言うんだ？

「説明してください、鷹取先輩！僕が……この僕が、一体なにをやったって言うんです！？」

僕は片肘をつけて半身を起こし、全身の痛みも忘れながらそう叫んだ。

比良坂はわけの分からない顔で僕たち三人を見ていたが、その、わけの分からなさ、も心のどこかで「相変わらず」と思っていたのかもしれない。どこか一線を引いた顔つきで、彼女はゲームのコントローラーを握り、ほんの数秒いじっていたが、すぐに飽きて放り出した。

「……まあ、とにかく、元気そうで何よりだわ」

鷹取先輩は比良坂の居る前でこの話題を続けたくないらしく、彼女の方をちらっと見ると、「まあ、とにかく」なんて言葉で場を濁した。僕はよっぽど重ねて先輩に訊ねようとしたが、先輩の怖い顔つきを見てやめにした。

「……比良坂、元気にしてた？」

僕が訊ねる。彼女は「まあね」と気のない返事。

「あんたは？」

比良坂が訊ねる。

「ごらの通りさ。すこぶる元気だよ」

包帯だらけの僕の姿を見て、みんなは笑った。

「ミイラ男じゃない」

「でも、元気さ。へっちゃらだよ」

はあー、と、比良坂は長いため息をついた。

「……大体から、あんたは少しドジなのよ。何をしていてもいつも上の空で、物事に集中してないから、だからそうなるの。きつとあんたの短い人生、向こう三回はこんな風になっちゃうわ。賭けてもいいいわよ。しかも、それで懲りた様子も無いんだから、あんたは本物の馬鹿よ」

比良坂が言う。

そうかもね、と僕は思った。

比良坂は啓一くと鷹取先輩の方を交互に見て、それから僕の方を見たが、どうも自分が場違いな人間のように感じているらしく、肩をすくめて、何とも言えない表情をした。鷹取先輩は気の良い微笑みを讃えているが、啓一くんは無表情に比良坂を見つめていた。

「……帰ろ。私も暇じゃないし」

と、比良坂。

「別に気を遣わなくていい」

と、啓一くん。確かに、比良坂からはどこか僕たちに気を遣っている感じがした。「気なんて遣わないわよ。なんであんた達なんかに気を遣わなきゃいけないの？勿体ない……じゃね！」

比良坂はそう言うのと、鞆を肩にかけ、立ち上がる。そしてこちらを一度も振り返らず、つかつかと迷い無くドアの方へ歩みを進めた。

「また会おうよ」

と、僕は彼女に言ったが、彼女はこちらを一瞬振り向いて、意地悪な笑顔を見せたっきり病室を出て行ってしまった。——そして、僕はもう、二度と比良坂に会えない事を直感していた。理由は分からないが、やはり、彼女はここには居ないのだ。僕はとてもしゃりきれない、寂しい気持ちになって、思わず苦い顔をしてしまった。

鷹取先輩が病室の窓を開けると、透き通った風が病室に入り込み、彼女の髪が美しく靡いた。先輩は目を細め、遠い灰色ヶ原の海を眺める。啓一くんは眠そうに欠伸をして椅子にもたれ掛かかり、やはり先輩と同じ方向に視線をやったのだった。

「……IDEAって、結局、何だったんだろう？」

と、僕は独り言のように呟いた。

「またその質問？百回聞かれれば、百回違う答えが出てくるわ。人生と同じ」

鷹取先輩はうんざりした様子でそう言ったが、しばらくして「……創造する力、かしら」と、独り言のようにそう呟いた。

「……理想とする世界を創造する力、破壊を創造する力、そして、遠い心の中の人物を創造する力……」

「さっきの比良坂がそうだって言うんですか？」

僕は言った。

「僕は昨日、あの……小日向比奈子にも会ったんです。そして、僕が心の半分をIDEAに置いただけの、どこにも行き着かない回送列車に乗ってるのって……あの子も、さっきの比良坂も、この僕が創造した人物だって言うんですか……？」

鷹取先輩はこちらを振り返って、じっと僕の顔を見る。

「あなたはね、ラッキーなのよ、春日くん」

と、鷹取先輩は不敵な笑みを浮かべてそう言った。

「あの二人の出現……比良坂さんと、比奈子ちゃんは……IDEA界が春日くんに残してくれた、最後のオマケじゃないかしら」

そうなんですか、と僕は答えた。でも、ちっとも意味が分からなかった。

「どこにも行き着かない回送列車ですって？……そんなの、当たり前じゃない。どこにも行き着かない回送列車に乗って、出口の無い迷宮を彷徨って、そして、羊飼いの後を迷子

のようにうるちよろついで行くしか出来ないのよ。だって、人生ですもの。死以外のどこに出口があるって言うの？」

鷹取先輩は珍しく熱っぽい、ぎらぎらとした目つきで、誰の方も見ずに言葉を続ける。「でも……でもね、春日くん。私たちは、それでも、迷いに迷って、出口に辿り着くまでに……何かを生み出す事が出来る。創造、する事が出来る。そして私たちの創造したものは、自分という殻を突き抜けて、全ての人々にシェアされる可能性を持っているの。例えばあなたの創造した、比良坂さんのように……私たちの考えは、迷いは、悩みは、想像は、創造、に変わること初めて意味を持ち、あるいは彗星のように直ぐに消え去り、あるいは太陽のように永遠に輝き続ける。でも、私はそれこそが……人々の、死、以外の唯一の脱出口だと、そう信じているの。絶対にね」

鷹取先輩の言葉に、僕は感銘を受けた。彼女の言葉に、何らかの真実が込められている気がしたのだ。

「……でも、ほとんどの創造物は……いつかは消えてしまうものだという事とも、忘れてはいけないいわ」

鷹取先輩のどこか独りごちた言葉。僕はさっきの比良坂を思い出した。

「ココロ」

と、啓一くんは控えめに彼女の名前を呼んだ。

「……前から思ってたけど、お前ってけっこうナルシストだよな」

鷹取先輩は、はっとすると、見る見るうちに固い表情を崩し、やり場のない羞恥心に頬を真っ赤に染めた。

「いったい何を……急に……」

「ナルシストだ。喋り方が」

「……別にそんな積もりは……」

もごもごと口ごもる鷹取先輩。彼女のこんな姿を見るのは、僕は初めてだった。

「なあ、春日。ナルシストだよな？」

啓一くんと鷹取先輩の視線がこちらに釘付けになる。

「馬鹿だなあ、啓一くん。僕たちはそんな鷹取先輩が大好きなんじゃないか」

僕の言葉がトドメになったのか、鷹取先輩は顔を真っ赤にしながら「そうやって二人して、年上を馬鹿にしてなさい」と怒鳴ると、ぶんすかと怒りながら病室を出て行った。

僕と啓一くんはしばらく鷹取先輩の消えたドアを眺めていたが、ふとお互いの視線が合うと、僕たちは火のついたみたいに笑い出した。

「啓一くん、キミは変わったよ」

僕がそう言うのと、啓一くんは、僕に向かってピースし、人当たりの良い笑顔を残して病室を出て行った。

ほんとに可笑しな姉弟だ。

二人は何があっても、永遠に仲の良い姉弟であるだろうと、僕は確信を抱いてそう思っ

たのだった。

——そしてここからは、啓一くんから聞いた話だ。

彼は病室を出て鷹取先輩の後ろ姿を探したが、彼女は一人でエレベーターに乗りこむところだった。啓一くんは慌ててエレベーターを止めるように叫んだが、先輩はさっさとドアを閉めると、一人で行ってしまった。しかし、それは先ほどのやりとりに怒った為ではなかった。少なくとも、閉じゆくドアの隙間から覗いた鷹取先輩の表情は、そんな風では無かったらしい。

妙な胸騒ぎがした。彼は慌てて廊下を走ると、エレベーターの前を横切って、まっすぐ非常ドアに突っ走った。足をもつれさせそうになりながら非常階段を全速力で駆け下りる。8階、7階、6階、5階……と、地上に近づくにつれて彼の不安は高まっていった。——皮肉にも、彼の直感はいつでも当たるのだ。

非常階段を下りきり、ドアを開け放って病院内に駆け込む。

下りのエレベーターはまだついておらず、数人の患者やその家族達が閉じたドアの前で待っていた。

彼はエレベーターに早歩きで近づきながら、エレベーター上部の表示板をちらっと見たが、一階のランプが点灯すると同時にエレベーターのドアは開いた。

鷹取先輩が出てくるはずのエレベーターに、ぞろぞろと入り込む人々。啓一くんは不思議に思って、慌ててエレベーターの中を覗き込み、思わず我が目を疑った。

鷹取先輩の姿が、どこにも無い。

彼女の姿は、まるで風か何かのようにどこかへ消えていた。

啓一くんは病院の中を探し回った。階段を上ったり、降りたり、もう一度僕の病室を覗いたが、僕の問いかけなど聞こえもしない様子で、慌てて廊下を走り去った。

鷹取先輩の姿が見つからないままに、自分の家に戻る啓一くん。

彼は真っ先に鷹取先輩の部屋をノックしたが、まるで空き部屋を叩いたように、返事は無かった。

「何をしているの？啓一」

啓一くんのお母さんが彼に問いかける。

「ココロの奴が……」

「ココロって……誰の事？」

お母さんが素っ気なくそう言う。

「何言ってるんだよ……ココロだよ、ここに住んでる……」

啓一くんは顔を半笑いに歪めながら、そう答える。お母さんは訝しげな顔つきで、啓一くんを見返した。

「……啓一、あなた、まだ寝ぼけてるの？気味の悪い冗談は止してちょうだい。春日くんの

お見舞いに行ったんなら、たまには受験勉強の一つでも……ちよつと、啓一！」

お母さんの言葉も途中に、啓一くんは走り出し、家を飛び出した。

灰色ヶ原の商店街、学校、海の前の大きな公園、浜辺……

彼はこの町の至る所を走り回ったが、鷹取先輩の姿はどこにも無かった。

彼女との出会いや、一緒に過ごした短い思い出が、ぐるぐると頭の中を回る。

彼の中には刻み込まれたように彼女の思い出があるのに、どういうわけか、この世にぽっかりと穴の空いたように、彼女の存在が感じられなくなってしまっているのだ。

ふと、脳裏をよぎる鷹取先輩の言葉。

「……でも、ほとんどの創造物は……いつかは消えてしまうものだという 것도、忘れてはいけないわ。」

彼はもはや理性を失い、全く自分の足の思うままに、ふらふらと、行き先も決めずに、ただ鷹取先輩の姿だけを探して歩いていると、偶然にもとある通りで山田さんとばったり出くわした。啓一くんの真つ青な顔を見て、山田さんはぎょつとしたが、同時に口クでも無い事が起こったのだとすぐに直感したのだった。

「どうしたの？何があったの？」

山田さんが訊ねる。

啓一くんは自分が何を聞かれたのかも分からず、首を横に振ることしか出来なかった。

「ねえ、何があったの？大丈夫なの、啓一くん？」

山田さんが、落ち着いて、重ねてそう訊ねた。

「ココロが消えた」

啓一くんは絞り出すような声でようやくそう呟くと、その場がすっかりと膝をつき、頭を垂れた。山田さんはやはりワケが分からず、それでも啓一くんの尋常じやない様子に、衝撃を受けたのだった。

「鷹取先輩が……？どこへ？」

山田さんの問いかけを、啓一くんは自分の中で何度も反芻させた。

ココロが、どこへ？

ココロの奴が、俺たちを置いて一体どこへ消えたのだろうか？

そもそもあいつは、どこから来たのだ？

本当に、ここに居た、のだろうか？

「ねえ、啓一くん、啓一くんってば！」

山田さんは啓一くんの肩を掴んで、彼を強く揺さぶった。啓一くんは項垂れたまま、じつと押し黙っていたが、ふとした拍子に慌てて顔を上げ、神経質な目で山田さんを見返した。ぎくり、と身を強ばらせる山田さん。

「山田、俺はここにいるよな？お前は……間違いなく、そこに居るんだよな！？」

狂人とさえ思えるような啓一くんの形相に、山田さんはぞつとした。



しかし彼女は、とても強い女の子だった。

「……アホなこと言ってんじやないわよ！居るにきまってんじやん！」と、山田さんは啓一くんの胸ぐらを掴んで、怒鳴り散らした。

「なんなら今ココで、あんたをぶん殴ってみせよっか!？」

山田さんにその気があったのかどうかは知らない。

でも、啓一くんはその時、出来ることなら本当にぶん殴って欲しかった。

今この瞬間にも、自分と、自分の目の前にある全てが、泡のようにはじけて消えてしまわないように。

「ねえ、鷹取先輩がどこへ行ったって言うのよ!？何とか言いなさいよ!」  
涙目になって問いかける山田さん。

一つの疑問が、僕たちの胸をこっそりとえぐり取り、巨大な穴を空ける。  
消えたかけがえのない夢の、朧な残光。

もはやそれは僕たちにとって、あまりにも遠すぎて、あまりにも手の届かないものだった。

——鷹取ココロは、どこへ行ったのだろうか？

僕たちを、啓一くんを置いて、いったいどこへ行ったのだろうか？

(完)